



静脩

1991年12月

Vol. 28, No 3

The Kyoto University Library Bulletin

鈴鹿本 今昔物語集をめぐる

文学部教授

安田 章

10月8日の夕刊各紙は、今昔物語集の鈴鹿本全9冊（巻二・五・七・九・十・十二・十七・二十七・二十九）が、その朝、所蔵者の鈴鹿家当主の紀氏から本学附属図書館に寄贈されたことを一斉に報じた。鈴鹿本が、今昔物語集の現存写本の中でも最古の、かつ、現存諸本のいずれをも従える、つまり祖本の位置にあるものであることは、広く知られていたが、蠹蝕の甚しいこともあって、各紙が鈴鹿本を「幻の写本」と称していたとおり、誰もが容易に披見し得ない、まさに高嶺の花的存在であったから、このニュースは、大きな感動を以って諸学界に歓迎されたに違いない。これまで何人の今昔物語集研究者が鈴鹿本を実見したことであろうか。

この本の存在が広く学界に知られるようになったのは、大正4年12月、京都帝国大学文科大学の機関誌『芸文』に掲載された、当主の父君、鈴鹿三七氏の手になる「今昔物語補遺」からであろう。巻二・十七の、「従来史籍集覧本にも丹鶴叢書本にも載せられてない未刊のものである」説話24が、その号から翌年にかけて、『芸文』誌上に紹介され始めたのであった。改めて大正9年11月、鈴鹿

三七氏は、氏の曾祖父、この本を購入された鈴鹿連胤（明治4年薨）五十年祭記念に、その「未だ世間に全く知られてゐない部分」を、より原本に近い形で、『異本今昔物語抄』として公刊された。この『異本今昔物語抄』の本文が、そのまま芳賀矢一纂訂『攷証今昔物語集』（大正10年刊）に収録されて、世に知られるところとなったわけであるが、鈴鹿本全9冊の本文が、読み易い形で、翻刻・提供されるまでには、なお40年の歳月を必要とした。日本古典文学大系（岩波書店）の『今昔物語集』（昭和34年～38年）がそれであった。古典文学大系本は確かに人々の渴を医しはしたけれども、用途によっては、活字翻刻では隔靴搔痒、困ることもある。例えば、表記・用字を初めとして、本文の体裁を踏まえての成立・形成の問題まで、今昔物語集を論ずる際に、現存写本の祖本と目される鈴鹿本のありようそのものをどうしても調べなければならないのであった。

学界に登場して80年、鈴鹿本は、今昔物語集研究の基礎資料として多くの研究者に活用される方向に向けて、改めて一步を踏み出そうとしている。

『異本今昔物語抄』の、本文提示に先立つ解題に、鈴鹿三七氏は、

この九巻の残欠本はもと奈良附近の古寺に在つたものと想像せられるが確かな記録が残つてゐない、それが転じて我が家の有に帰したのは天保の末頃であらう……曾祖父連胤の努力によるものである。

と記されていたが、鈴鹿家の有に帰する以前の、天保4年(1833年)正月に、この本の巻十二を見た人があった。国学者伴信友である。彼は、その顛末を、

奈良人某ノ蔵テル古本ノ今昔物語集第十二巻一冊ヲ見ル、或人ノ計ラヒタダ二日ヲ限りテ借ル事ヲ得テ校合セリ

で始まり、

此本全ク備リテ在ルニカ欠ナガラモノホ在ルニカ、イマダヨクモ聞定メカネツ、時アリテマタマタ得テミムヨシモガナ

と結ぶ「十二巻奈良本批校之間事」に書き記している。彼の念願——時アリテマタマタ得テミムヨシモガナ——は11年後に叶えられるところとなった。「十二巻奈良本批校之間事」に続く「追記」として、信友は、

天保十五年三月京ニアリテ鈴鹿筑前守連胤ノ近頃奈良ヨリ購得タリトテ秘蔵ル此物語集ノ古写本ノ闕卷ヲ乞得テ見ルニ、本朝部第十二第廿七第廿九ノ巻三冊アリ、其第十二巻ハ上件ニ記セル如ク既ニ己ガ本ニ校セル古本コレナリ……ソモソモ去シ天保四年ニ此古本ノ第十二巻ヲ見テ、欠ナガラモノホ世ニ有ラバト見マホシカリツルニ、十年ヲ経テ後今ユクリナク京ニ来テ件ノ二巻ヲ見ル事ヲ得タルゾメゾラシキ

と書き遺している。この記述から、信友が「奈良本」と称していたその本が、外ならぬ鈴鹿本であったことが判明するのである。

天保4年、巻十二1冊についての、しかも、「タダ二日ヲ限リテ」の調査で、彼は、奈良本の性格を見抜いていた。即ち、

其奈良本……通校スルニ、今ノ写本ハモト此奈良本ヲ写タルヲ次々ニ転写セルモノトミユ

これを今日の表現に改めれば、奈良本は現存写本の祖本である——ということになる。そして、その「証」として、彼は、

奈良本折口ノ方イタク蠹損シテ字ヲ失ヘル処多シ、写本ニ字ヲ欠タル処悉其蠹損ノ処ナリコレ今ノ写本スナハチ此奈良本ヲ以テ写セル証トスベシ

と述べているが、120年後、鈴鹿本を実見して、彼の「十二巻奈良本批校之間事」と別個に、同様の推断を下したのが、馬淵和夫「今昔物語集伝本考」(『国語国文』昭和26年5月)であった。

天保15年の調査において、信友は、「ソノ第二十七巻ノ第四十語ノ初張ノ左ノ末ノ行」の「紙端ノ縫下ニ虫損ノ間ニ字見ユルヲ、ヤヲラ推排キテ」奈良本を書写した時の「筆ササヒ」と見られる書き入れを発見した。それは、奈良本(鈴鹿本)の、更には今昔物語集そのものの成立論や成立圏の問題に直接結び付くはずもないけれども、書写の場について問題を提供した。この類の、本の綴じ目の部分、いわゆるノドの奥にある——全て料紙の端にあたり、袋綴に装訂すると綴じ込められて見えなくなる——書き入れは、酒井憲二「伴信友の今昔物語集研究」(『山梨県立女子短期大学紀要』第9号)「伴信友の鈴鹿本今昔物語集研究に導かれて」(『国語国文』昭和50年10月)によると、巻二十七にもう1ヶ所、巻十・十二・十七にそれぞれ1ヶ所、都合5ヶ所にあるという。

鈴鹿本の修復がどのようになされるものか知らないが、9冊の全てにわたって、総裏打を施す必要があるだろう。そのために、一度は綴糸を切って解体しなければなるまい。それは、書写後現形態に装訂される以前の1枚1枚に戻すことになるわけであるが、その際に、どのような、伴信友以来の新しい事実が出現するか、今から楽しみである。

「然モノセルホドニ其蠹損ノ僅ニ残レルガ塵トナリテ失」われて行くはずだから、修復作業は「紙ノ縑レ縮ミ或ハ堅マリテアルヲ小竈ヲモテ懇切ニ開キ意ヲ尽シテ細ニ」なされるに相違ない。その完成を待つ間にも調べてみたいことがある。

その一つは、信友は「奈良人某」と言い、鈴鹿三七氏は「奈良附近の古寺」とする、この本の出所についてである。鈴鹿本を収納してあった、見るからに古色蒼然たる箱には、「今昔物語集」と直接墨書されており、蓋の裏に印が捺されていたように記憶する。もしそれが読み解けるならば、そこがこの本の出所であると速断することは避けなければならないにしても、鈴鹿本（奈良本）、今昔物語集の享受、流通について、問題を投げかけるであろう。鈴鹿本が、単に今昔物語集研究のみ

ならず、広く中世文化史の研究に大きな便益をもたらして行くことは疑いない。

鈴鹿本の特異な形態と謎の多い伝流、書写の特異性の意味するところは、今後の研究が必ず引き継いで行かねばならない大きな課題である（池上洵一「『日本文学研究大成 今昔物語集』解説」）

今や真の意味での公開——複製本の作製・公開の日が待たれるところである。

(03・12・01)

『西アフリカの歴史と民族』コレクション

アフリカ地域研究センター助教授

市 川 光 雄

数年前の昭和天皇の大葬の礼には、アフリカからも国家元首や大臣クラスの高官が多数列席した。天皇及び天皇制に対する興味もあったであろうが、おそらくそれ以上にアフリカ諸国の関心が、経済大国日本が果たすべき「国際的役割」にあったことはまちがいない。日本からの援助を期待して、このときにはたしてどのくらいの会見がおこなわれたのであろうか。その時の様子を伝えるテレビを見ていて啞然としたことを覚えている。それは中央アフリカのある国の代表と会見した国会議員の談話を伝えたものだが、この議員は、「アフリカにこんな国があることは知らなかった」と語っていた。アフリカの国名を知らなかったこと自体も問題ではあるが、それ以上に驚かされたのは、日本の代表として会見したこの議員がマス・メディアをまえにして、アフリカに関する無知を恥じる様子がまるでなかったことである。アフリカと日本との関係はまだこんな程度のものであったのかという思いであった。

植民地化以前からアフリカに深くコミットしていた西欧諸国とくらべて、日本におけるアフリカ理解や研究が遅れていたのはある意味ではやむを得ない。研究に必要な基本的な資料さえ、日本ではほとんど手に入らなかったからである。また、

日本がアフリカとの間に植民地支配というシビアナ関係をもたなかったことを考えれば、これまで比較的関心が薄かったのも理由のないことではない。しかし現在のアフリカは51の独立国を有し、国連の全加盟国の3分の1近くを占める大勢力である。日本との経済的な関係も深まり、アフリカ諸国に対する政府開発援助は東南アジアに次いで2番目となっている。今後ますます日本とアフリカ諸国との関係が強化されてゆくことはまちがいないであろう。過去において日本とアフリカとの間に密接な関係が形成されなかったのは事実であるが、逆にいえばこれは、植民地支配によって歪められた西欧諸国の視点とは異なる見方を日本が示し得ることを意味する。そうした認識に立って、最近日本でもようやくアフリカに対する正当な関心が芽生えてきた。このような状況において、このたび本学中央図書館に、西アフリカの歴史と民族に関する文献資料のコレクションが設置されたことはきわめて意義のあることと考える。

本コレクションを所蔵していた故ダグラス・ジョーンズ博士は、イギリスにおけるアフリカ史研究の第一世代に属する学者である。リバプール大学で歴史学を専攻した後、1951年に、新設されたばかりのロンドン大学東洋・アフリカ学研究所の